

ナチュラルキス
～新婚編4～

1 お楽しみ之选択　　（沙帆子）

「ふわわあ〜っ」

目覚めた途端、大きなあくびが出た。

横向きに寝ていた佐原沙帆子は、もそもそ動いて仰向けになる。ぽおっとしつつも、ゆっくりと
臉まはたを開けた。

ぼんやりした光がカーテンの隙間すまから差し込んでいる。

う、うん……もう、朝……？

静まり返っている室内に、微かな寝息なみせが聞こえる。

ハツとした沙帆子は、急いで寝息が聞こえるほうに顔を向けた。

黒いパジャマを着てそこに寝ているのは、もちろん沙帆子の夫の啓史だ。

さ、佐原先生、まだ寝てる！

これって、望んでいた状況を、ついに迎えたってこと？

や、やった！　心の中で叫び、ぐっと拳こぶしを握る。

わたし、ようやく、ようやく佐原先生より早く起きられたんだ。

沙帆子は、なかなか啓史より先に目覚めることができず、毎朝がっかりしていたのだ。それが……やつと念願が叶った。

喜びを噛みしめつつ、沙帆子はそつと身体を起こした。そして、啓史を見つめる。うん、すやすや寝てる。はあつ、嬉しいなあ。こんな風に先生の寝顔を見られるなんて……眼福♪

しばらくの間、惚れ惚れと眺め続ける。触れてみたいが、そんなことをしたら、きつとすぐに起きてしまうだろう。見つめていられるのは彼が寝ていればこそだ。こんなチャンス、みすみす逃してなるものか。

それに、今朝はゆつくりできる。

なぜなら、今日は日曜日。啓史の実家と、彼の伯父夫妻が住む橘家なつばなに行く予定だが、家を出るまでには、しばらく時間があるのだ。

うーん、でも……ベッドの端と端で寝ていたとは……

どうせなら、べつたり密着して目覚めたかった。啓史の腕にやさしく包み込まれていたなら、天国にいる気分を味わえたのに。

それにしてもよく眠っている。完全に、無防備状態だ。

そう思ったら、ドキドキしてきた。

いまなら、なんでもやり放題なんじゃないか？ どこでも好きなところに触れられる。

あつ、けど、触ってしまったら起きる可能性が高いから、チャンスは一回しかない。

どうしよう？ 何をしよう？

前髪に触れたりとか、耳たぶをそつと口に含んだりとか……

きやーっ！ 駄目駄目、いくらなんでもそれは大胆過ぎる。

なら、首筋を撫なでるとか？ 指で唇をなぞるっていうのも捨てがたいかも。

自分で作った大胆な選択肢に、鼓動がどどん速まっていく。

よ、よし！ 唇をなぞってしまおう。そう決めた途端、急激に緊張する。

こくと喉を鳴らし、沙帆子は啓史の唇に指先を近づけていった。

唇まで、あと一センチ。緊張はさらに高まり、指先がブルブルと震え始める。

沙帆子はさつと手を引いた。

ここはいったん落ち着こう。うん、そうしよう。

自分をなだめたあと、啓史に顔を近づける。まだ起きた様子はなく、安堵あんどした。

そうだ、いままさに寝顔の写メを撮るチャンスではないか。寝顔の写メは、すでに一枚ゲットしているが、このベッドに寝ている啓史の写メはまだ手に入れていない。

あつ、でも……携帯を居間に置きっぱなしだった。

まずそれを取ってこなければ、話にならないのだが、沙帆子は窓際に寝ていたから、彼をまたがないとベッドから下りられない。……でも、そんなことをしたら啓史は絶対に起きてしまう。

残念だが写メは諦めるしかない。となると残る楽しみは、啓史が目覚めるまで寝顔を見ているか、一発勝負で触れてみるか……

うーん、そうだな。やつぱり触れるのはやめて、ここは寝顔を楽しむことにしよう。

そう決めた沙帆子は、むふふと笑い、ベッドを揺らさないように気をつけながら両手をつけて、啓史の寝顔を眺めた。

しかし、この状況……本当に不思議だ。佐原先生のベッドにいて、彼の寝顔を覗き込んでいるとは……

わたしが佐原先生のお嫁さんだなんて、冗談みたい。

次の瞬間、彼女はその考えを頭の中から追い払った。

いやいや、これは現実なの。わたしは佐原先生の妻なんだから、遠慮せずに、もつともつと大胆でもいいはず……

いっそ、唇にキス……しちゃうとか？ そう考えただけで、ポツと顔が燃える。

考えたら、昨夜、先生に抱きついたあげく、『先生、大好きっ！』なんて、口走ってしまったんだ。は、恥ずかしい！

だって、先生が白衣を着てくれるっていうから……

白衣を着た先生を撮りたいとか、白衣を着た姿でぎゅっと抱き締めてほしいとか、言っちゃったんだよね。あのあと、恥ずかし過ぎたものだから、照れ隠しにゲーム機のコントローラーを掴んで、つい余計なことを言ってしまった……

『今夜はいつさい手加減しませんからねえ』

あんなクソ生意気な口をきいてしまうとは……

すべてはテンパっていたせいなのだ。

佐原先生は大人なんだから、そういうわたしの気持ちを汲み取ってくればいいのに、マジでキレちゃって……

『ちよつと手加減して、楽しませてやるかと思つたのに……。お前がその気なら、手抜きなしでやつてやるうじゃないか』

そしてその言葉通り、いつさい手加減してもらえず、ゲームの結果は散々だった。

そうこうしていたら急に睡魔に襲われて、ゲーム中なのにいつの間にか寝てしまったのだ。

身体がゆらりと揺れて驚いて目を覚ましたら、なんと沙帆子は啓史にお姫さま抱っこされていて……

心の中でキヤーキヤーとピンクの悲鳴を上げていると、啓史がでかうさを脅し始めたものだから、つい薄目を開けて様子を窺った。

そうしたら先生と目が合っちゃって……ぎよつとして、慌てて寝たふりをしたんだけど……あれは大失敗だったな。思い出すだけで恥ずかしい。

そんな感じで色々あったけど、寢室に運んでもらったあとは、すつごくいいムードになって……

だ、駄目駄目、この先は思い出しちゃ駄目。

沙帆子は自分の頭をポカポカ叩いた。

身体が揺れているような気がして、啓史は目を覚ました。
なんだ？

眉を寄せ、瞼まぶたを薄く開けてみたら、沙帆子がベッドの上に座り込んでいた。
なぜか彼女は、自分の頭をボカボカと叩いている。

「お前、何やってる？」

声をかけると、沙帆子はピタリと動きを止めた。両の拳こぶしを頭に当てたまま、啓史に目を向けてくる。びっくり顔で固まっているのが笑えてならない。

「どうして頭なんか叩いてる？」

「いえ。そ、そのお〜」

目を泳がせた沙帆子は、頭の上の拳こぶしをそろそろと下ろす。

「ちよ、ちよーつと、その…叩きたくなっちゃったというか」

「なんで、叩きたくなったんだ？」

「な、なんでって…べ、別に、これといって理由は…」

「嘘をつくな。ひとは理由もなく、自分の頭を叩いたりしないもんだ」

そう突っ込んだら、彼女は不服そうな顔をして黙り込んでしまった。

「おい」

返事を強要するように呼びかける。

沙帆子は一瞬ビビった様子を見せたものの、啓史を見つめ返してきた。

「先生、もう起きますか？」

「まだ俺の質問に答えてないぞ」

答えをさらに促うながすと、逃げ場がないとも思ったのか、沙帆子はベッドに突っ伏した。

「なんなんだ？」

呆れてしまったが、突っ伏している沙帆子の格好が面白くて、笑いが込み上げてくる。

自分が隙すまだらけだっただけのことを、こいつはわかっていないようだ。これでは、さあ好きにしてくださいと言っているようなもの。

さて、どう料理してやろうか？

にやりと笑った啓史は、沙帆子の背骨に沿そって指を滑すべらせた。

「はひっ！」

沙帆子はおかしな悲鳴を上げて、起き上がろうとする。もちろんみすみす逃す気のない啓史は、彼女の細いウエストをぐっと押さえた。

「な、な、な…何するんですかー！」

「何って、お前の腰を押さえつけてるけど」

「そんな当たり前前の答え、求めてません！ 放してください！」

「頭を叩いていた理由を話せ。そうしたら、放してやるう」

「そ、そんな条件ずるいですよお」

「別にずるくはないだろう」

会話をしている間も、沙帆子は啓史の手から逃れようと、躍起やっつきになってもがいている。

本当に非力だよな。これっぽつちの力で押さえただけで、身動きできなくなるんだからな。

「せんせー、放してください」

啓史は押さえつけていた手を離し、ジタバタしていた沙帆子を仰向けに転がした。

「きゃっ」

可愛い悲鳴を上げるその様は、まるで飼い主に遊ばれている子犬みたいだ。

「ずいぶんと反抗的じゃないか？」

啓史は沙帆子の目を覗き込みながら、脅すように問いかける。

「そ、そんなつもりは……」

「ほら、さっさと話せ」

「だ、だから話せません」

「ほお。つまり、お前が自分の頭をボカボカ叩いていた理由は、俺に話せないような内容なわけか？」

そう言っつてやると沙帆子は急に起き上がった。

「先生、もう起きないと。今日は先生のご実家と校長先生の家に行かなきゃならないんですし、早

く朝ご飯の用意を……」

四つんばいでそんなことを言いながら、沙帆子は啓史の身体を乗り越えて、ベッドから下りようとする。

そうはさせるか。

啓史は、沙帆子の脇に腕を突っ込み、たやすく動きを封じた。

「ああっ」

そしてそのまま沙帆子を胸に抱き込み、ベッドに胡坐あぐらをかいている自分の膝に、彼女を座らせる。

「せ、先生」

「休みなんだし、朝飯は遅くていい」

もう少し沙帆子と密な時間を過ごしたい。

「あ、あの、それじゃあ、いまから昨日の約束のほうを……ひとつ」

「昨日の約束？」

「は、はい」

期待するような目を向けられるが、なんのことか、ぴんとこない。

「先生、あれです。ほ、ほら……その……は、白衣を……って約束です」

言いつづらそうに、もごもごと言う。

白衣か……そうだったな。こいつ、白衣を着た格好で抱き締めてほしいとか、白衣を着た俺の姿を写メに撮りたいとか言っつてたんだよな。

さほど拒むような願いではないのだが……いまはそんな気分じゃない。
「先生？」

すでに心の中で却下したというのに、目の前には、瞳に期待を込めた奴がいる。
啓史は顔をひくつかせた。

密な時間を楽しむつもりだったが……

天秤てんびんにかけ、決断する。

「やっぱり腹が減った。朝飯を食おう」

沙帆子をひよいと膝から下ろした啓史は、さっさとベッドから出る。

「ええーっ！」

沙帆子の抗議の叫びが聞こえたが、啓史は構わず寝室から出てドアを閉めたのだった。

3 笑いにひと苦勞 〈沙帆子〉

寝室のドアが閉まり、沙帆子はぷっつとほっぺたを膨ふくらませた。

白衣を着てくれるって約束したのに……逃げるなんて。

はあっ、おねだりするタイミングを間違えたなあ。

珍しく甘い雰囲気になったから……いまだ！ って思ったんだけど……

啓史の気持ちはなかなか読むことができない。

それにしても、もったいないことをしてしまった。せつかくの甘いムードも、おじゃんにして……
考えれば考えるほど惜しくなる。後悔先に立たずか……

沙帆子はしょぼくれて寝室を出た。

「先生、何時に家を出ます？」

トーストにりんごジャムを塗りながら、沙帆子は啓史に尋ねた。

「そうだな……向こうには十時過ぎくらいに着けばいいだろ。九時半に家を出るか？」

「そうですか」

まだ七時半だ。二時間あれば、気になっていたクローゼットルームの整理ができる。結婚式のあと、持ち帰った荷物を運び込んで、そのままの状態なのだ。あそこで着替えるたびに早く片付けた
いと思っていた。

「先生、わたしクローゼットルームを片付けたいんですけど……」

「そうか。なら、俺は他の部屋を掃除しとく。花の水も替えておくから」

居間に飾ってある花に目を向けながら啓史が言う。

「はい。お願いします」

活いけてから一週間経つが、充分綺麗だ。

「まだ凄く綺麗ですね。先生がこまめに水を替えてくれていたから……」

「水を替えるくらい、簡単な作業だからな」

そっけなく啓史が言う。

啓史はなんでもないことのように言うが、そういう簡単な作業も、仕事で疲れていたりすると、面倒になったりするものだ。結婚式場から持ち帰った花だからこそ、大事にしてくれているように思えて嬉しくなる。

沙帆子は胸を弾ませて、りんごジャムをたっぷり塗ったトーストをパクツと食べた。

ほんわかした甘味が口中に広がり、さらにしあわせな気持ちになる。

「沙帆子」

「はい？」

なにやら急に深刻な口調で呼びかけられ、少々驚いて返事をする。

「あの、なんですか？」

「いや……昼飯のことだが」

その言葉だけで、沙帆子は啓史の言いたいことがわかった。

啓史は甘い物が好きではないのだが、なぜか彼の母である久美子は、息子は甘い物が好きだと思っ込んでいるのだ。そのため、いつも啓史の料理だけ甘い味付けにしてしまう。

そんなわけで、啓史の実家に行き、久美子の手料理を食べることになったら、料理を取り替えてほしいと頼まれていた。

「わかってます」

「だが、そう簡単にはいかないんじゃないかと思う。そのときは、もういいからな」
うーん。確かに先生の言う通りかも。

気づかれないように、ふたりの皿を入れ替えるなんて、口で言うほど簡単ではなさそうだ。
「でも、頑張ってみます！」
拳を握って宣言したら、啓史が苦笑する。

「だから、頑張るなって」
否定されて、沙帆子は戸惑った。

「うん」

啓史は頷き、安心した表情でコーヒーを飲む。

胸をいっばいにして、朝食を食べていた沙帆子は、ふとあることを思い出した。

「先生、お化粧はどうすればいいですか？」

「ああ……そうだな。……一緒に外出するんだし、助手席に乗っていくなら……」

「は、はい。無理はしません」

「うん」

啓史は頷き、安心した表情でコーヒーを飲む。

胸をいっばいにして、朝食を食べていた沙帆子は、ふとあることを思い出した。

「先生、お化粧はどうすればいいですか？」

「ああ……そうだな。……一緒に外出するんだし、助手席に乗っていくなら……」

「は、はい。無理はしません」

「うん」

啓史は頷き、安心した表情でコーヒーを飲む。

胸をいっばいにして、朝食を食べていた沙帆子は、ふとあることを思い出した。

「先生、お化粧はどうすればいいですか？」

「ああ……そうだな。……一緒に外出するんだし、助手席に乗っていくなら……」

「その……テッチン先生にお会いすることになるなら……」

「徹兄？」

啓史の兄である徹は、沙帆子の中学の時の担任なのだ。啓史の実家を初めて訪問したとき、沙帆子はぼつちり化粧をしていた。すると、徹に化粧のことで咎められてしまったのだ。そのことを思い出すと、気まずい思いに駆られる。

「……お前が嫌なら、やめておくか？」

「いいんですか？ でも、車に乗っているところを誰かに目撃されたら大変だし、……あっ、なら、後部座席に寝転がって隠れています」

「いや、それはさせたくない」

「先生……」

「そうだ。帽子はないのか？ 顔が隠れるような深めのやつ」

「帽子ですか……ないこともないですけど」

顔がどこまで隠れるかはわからないが……いくつか持つてはいる。

「それじゃ、クローゼットルームを片付けるついでに、探してみます」

このマンションに沙帆子の荷物を運び込んだとき、それなりに整理して片付けたはずなのだ。が……そのときの記憶が少々曖昧なのだ。

あの頃のわたし、先生との結婚やら両親の引越やらで、頭の中がいっぱいで……

「よし。それじゃ、さっさと食べて、取りかかるか？」

「はぐ」

沙帆子は明るく答え、朝食を急いで口に押し込む。

「お、おい、慌てて食うな」

「ふひまふえん」

『すみません』と言うつもりが、頬張り過ぎてまともにしゃべれない。

「まったく何やってんだ。ほっぺたまんまるに膨らませて、お前ハムスターみたいだぞ」
くつくつと啓史は楽しそうに笑う。

顔を赤らめて彼を睨んだものの、すぐに笑いが込み上げてきてしまう。おかげで、口の中のものを噴き出さないようにするのに、沙帆子は苦労した。

4 様変わりした部屋 〈啓史〉

沙帆子が片付けのためにクローゼットルームに籠っている間、啓史は掃除機をかけながら考え込んでいた。

化粧のことで、沙帆子は徹に対してかなり引け目を感じているようだ。今日は帽子を被ることにして化粧をしないことにしたが……用心のためにも、出かけるときは常に化粧をしたほうがいいと思う。

今日、徹兄は家にいるのだろうか？

徹は中学の教師をしている。休日も部活の練習があつて留守にすることが多い。

啓史は掃除機を止め、ポケットから携帯を取り出して電話をかけた。

呼び出し音がしばらく続くが、徹はなかなか出てくれない。

徹兄、いまは忙しいのか？ それとも運転中とかかな？

諦めかけたそのとき――

「よお、啓史」

「徹兄、いまいい？」

「ああ。それにしても、なんか久しぶりだな」

徹の陽気な声に、啓史は小さく笑った。

啓史と徹が話すのは、結婚式の日以来になる。後日、式の写真をメールで送ってくれたのだが、その礼はメールで伝えた。電話で話すことさえも照れくさかったのだ。

でもそれは、徹も同じだったろうと思う。

結婚式の夜、徹からかかってきた電話でのやりとりを思い出し、噴き出してしまいくらいになる。

初夜を迎えるにあたり、なにより必要なブツがないことにへこんでいたところに電話がかかってきたのだ。

徹兄にはありえない、実にしどろもどろな口調で……

「おい啓史、何を笑ってる？」

咎めるような声が飛んできた。笑いを堪えていたのだが、伝わってしまったらしい。

「いや、わざわざ言わなくても、わかるだろう？」

「むっ……お前な！ ま、まあ、いい。そのことについては……。とにかく、仲良くやれるのか？」

「俺に聞かなくても、色々なところから情報が入ってるんじゃないのか？」

「まあな。しかし、幸弘ゆきひろさんはいいな」

声を弾ませて徹が言う。唐突に出てきた沙帆子の父親の名に驚きつつも、頷く。

「だろう」

「ああ。話していて面白い。向上心まで湧く。親父も尊敬しているが、ああいう親父もいいなと思っ
たな」

「そうか」

幸弘のことを褒められ、啓史は、自分が褒められる以上に嬉しくなった。

「そうそう、学校で騒ぎになってるって……」

「それについては、そっちに行つてから話すよ」

「わかった。それで、なんで電話してきたんだ？」

「ああ、うん。あの、徹兄は、今日は実家にいるのか？」

「いるぞ。色々話を聞かせて……いや、まあ……慣れたいってのが本音だな」

「慣れたいって……沙帆子が俺と結婚したこと？」

「そういうことだ。どうにもまだ、お前とエノチビが結婚したことを受け入れられてない。お前た

ちの結婚式には出たが……ほら、エノチビの奴、化粧をして別人みたいだったろ？ だから、こう……な？」

わかるだろうと同意を求めるように言う徹に、啓史は「ああ。わかるよ」と答えた。

同時に、慣れたいと思ってくれる徹を、ありがたく思う。

「俺に比べて順平は順応性が高いぞ。兄嫁が来るってんで、大はしゃぎだ。幸弘さんが家に来たときは、借りてきたネコみたいにおとなしかったが……」

「なんだ、順平の奴、まだ幸弘さんのことを怖がってるのか？」

「どう対応していいかわからないだけだろう」

徹の言葉に苦笑した啓史だが、こんな話をしている暇はないんだっと思った思い直す。

啓史はさっそく、用件を切り出した。

「徹兄、話しておきたいことがあるんだ」

「うん、なんだ？」

「俺と沙帆子が結婚したことは、あいつが卒業するまで隠し通さなければならぬ」

「それで？」

「ふたりで出かけるときには、学校の登下校時もだけど……俺たちの姿を目撃されてもバレないように、あいつは化粧をすることになった」

「そうか。そういうことなら仕方ないだろうな」

徹は本当に仕方なさそうに言う。やはり、自分の教え子である沙帆子が化粧をすることは、受け

入れ難いようだ。

「うん。だけど、沙帆子は徹兄に化粧した顔を見られるのが辛いようなんだ」

「ん……そういうことか」

徹は悔やむように言う。

「あのとき、手厳しく叱つちまったからな」

結婚の報告のために、沙帆子を初めて啓史の実家に連れていったとき、彼女は化粧をしていた。徹は化粧をしている沙帆子を見て、こっぴどく説教をしたのだ。

「さつきも、化粧をするのを嫌がった。今日のところは、帽子を被っていくことにしたけど……」

「そうか……わかった。それについては、エノチビと話をさせてもらう」

「よろしく頼むよ。ああ、それと……写真、送ってくれてありがとう」

「おう。写真集のほうも見たのか？」

「芙美子さんに見せてもらった。ところであの写真集って、余分はないかな？」

「お前たちの分は、今日渡すつもりだが」

「もう一冊欲しいんだ。昨日、芙美子さんの実家に行ったとき、お義祖母さんに渡してしまったから」

「えっ、あれを渡した？」

徹は驚いたらしく大きな声を上げ、さらに急ぐように尋ねる。

「訪問するとは聞いていたが、結婚したことも伝えたのか？」

「芙美子さんの母親だけだよ。芙美子さんも、母親には隠し通せなかったようだった」

「それで、大丈夫だったのか？」

「ああ、受け入れてくださった。結婚も、俺のことも」

「そうなのか、よかったな」

ほっとしたように徹は口にする。

「それじゃ徹兄、十時過ぎにはそっちに行くつもりだから、またそのときに」

「ああ。じゃあな」

通話を切り、携帯をポケットに戻した啓史は、沙帆子のいるクローゼットルームを窺った。

どんな様子か一度覗いてみるかな？ いや、掃除機をかけ終えてからにするか。

啓史は足元に置いていた掃除機を取り上げ、居間の掃除を再開する。

ソファの周りを掃除していると、ピンクの物体がどうにも気に障ってくる。無視しようとしても、どうしてもピンクが視界に入ってくるのだ。

「この野郎！」

啓史は振り返って、右腕を振り上げ、でぶクマを威嚇した。

「存在感を消せっ！」

怒鳴りつけるが、ふてぶてしい顔で啓史を見つめ返してくる。

「それにしても、お前、もつと可愛く作ってもらえなかったのか？」

腹を立てていたはずなのに、つい同情を滲ませてしまった。

だけど、沙帆子たちは揃って可愛いと騒いでいたな。まるで理解できないが……女の好みは、男

とは違うってことか？

でぶクマから視線を逸らし、今度は、飾り棚の上に置いてあるフリフリの物体を見やる。

母、久美子を作ってくれたリングピローだ。これを目にするたび、なんとも照れくさい気分になる。

啓史は、改めて部屋全体をじっくりと見回した。

ゴミ箱に活けられた薔薇の花にピンクのでぶクマ、オーストラリア土産のコアラに、リングピ

ロー……

笑えるな。これがいまの俺の部屋とは。

敦が見たら、大騒ぎして俺を冷やかすだろう。もちろん、あいつをここに招く気はないが……

親友である敦から、深野の婚約祝いに沙帆子も連れてきたらどうかと提案された。

化粧をしていけば、高校生だとはバレないだろうが……俺のダチとの飲み会に参加しても、沙帆

子は楽しめないに違いない。それに緊張するだろうし……一緒に行くかとは誘えないよな。

けど……会わせておきたいと思うのだ。

まあ、この件についてはゆっくり考えよう。

5 ミッション大失敗 〈沙帆子〉

沙帆子は唇を突き出して、首を傾げた。

いましがた啓史の声が聞こえたのだが、沙帆子に呼びかけたわけではないようだ。先生、電話でもしてたのかな？

沙帆子はクロゼットルームを見回し、次はどこを片付けようかと迷う。ウエディングドレスの入った箱が、かなり場所を取っている。

……これって、一度クリーニングに出したほうがいいよね？
でも、クリーニング屋さんで対応してくれるのかな？

持っていったものの、店頭で『こんなものは無理です』と断られたら恥ずかしい。うーむ、ママに相談してみよう。

さてと……あとは？

沙帆子は床に置いてあるピンクのバスケットを見つめ、考え込む。この中には、啓史には内緒のお宝写真が入っている。彼に気づかれないように自分の机の引き出しに移動させたいのだが、いまだに移動させられていない。

バスケットの前にはしゃがみ込んだものの、掃除機の音が近づいてきている。

先生、廊下の掃除に取りかかったみたい。……いまは無理だな。片付けながらチャンスを探ろうとしよう。

床に置いてある物をいくつか片付けた沙帆子は、アイロンに目をやった。アイロンとアイロン台は、これから毎日使うのだし、出しやすいところに置いておくほうがいいな。

あつ、そうだ。洗濯物を取り出してきて畳まないで。夕べ、風呂上がりに乾燥させてそのままだ。

ドアを開けて廊下に出てみると、啓史は仕事部屋の掃除をしているところだった。開いたドアから掃除機をかけている啓史を覗きつつ、洗面所に向かう。

ついつい足取りが弾んでしまう。だって洗濯物の中には、啓史の白衣もあるのだ。

ドラム式の洗濯機の扉を開けて中身を全部取り出し、クロゼットルームに抱えて戻る。

沙帆子はウキウキしながら畳み始めたが、最初に手に取ったのは、もちろん白衣だ。

きやはーっ、先生の白衣♪

アイロンは今夜にでもかけることにして、丁寧に畳んでおく。

それにしても、白衣を着るといふ約束を守ってくれる気はあるんだろうか？

でも、あまりしつこく言ったら、機嫌を損ねてしまいそうだ。ここは慎重にいかないと……

次の洗濯物を手に取った沙帆子は、思わずぎよっとしてしまった。

こ、これは、佐原先生の……

黒いそれを、沙帆子は顔を赤らめてパパッと畳んだ。

こういうの、いつまで経っても慣れられそうにない。照れくさいっらない。

洗濯物をすべて畳み終わった沙帆子は、ドアを静かに開けて啓史の様子を窺ってみた。寝室のほうから掃除機をかけている音がする。

よーし、チャンスが巡ってきた。沙帆子はドアを閉め、ピンクのバスケットに飛びついた。

何度も失敗してきたけど、今日こそはこのミッション、無事にやり遂げよう。

沙帆子は鍵を開けようとしたが、気が急いでいるのか、なかなか開けられない。

落ち着けえ、落ち着くんだ。

一度ゆっくりと深呼吸してから鍵を開ける。

バスケットの蓋を開けた沙帆子は、披露宴で公開された写真と、徹からもらった写真が入った箱を胸に抱え込み、急いで立ち上がった。

このまま仕事部屋に移動だ。そしてミッションを成功させるのだ。

頑張れ、わたし！

クローゼットルームを駆け足で出たら、なんと啓史の姿が見え、ぎよつとする。

うわわっ、もう寝室の掃除終わっちゃったの？

驚きのせいで立ち竦^{すく}んでいたら、薔薇の入ったゴミ箱を抱えた啓史がこちらを振り返った。

ふたりの目がぼつちり合う。

きやーっ！

「なんだ？ 沙帆子、どうかしたのか？」

「は、はい。な、な、なんでもありません」

ああっ、もおっ、わたしときたら、こんなにおどおどしていたら怪し過ぎるし。平然としなきゃ！
なんとか普通に笑おうとするが、顔がひきつってしまふ。

すると、とんでもないことに、啓史はいったん薔薇を下ろして、沙帆子に歩み寄ってきた。

ま、まずいっ！

動転した沙帆子は、くると背を向け、クローゼットルームに逃げ込もうとしたが、あっさり捕

まってしまう。

「ああっ、放してください」

「どうしたんだ？ お前、何を抱えてる？」

「し、私物です。勉強機のほうに移動させようと思つてです……」

「ふーん。私物を移動させるだけなのに、なんでそこまで動揺してる？」

「べ、別に、わたしは動揺なんて……」

そう言った瞬間、胸に抱えていた箱を啓史に奪われそうになり、沙帆子は必死に抵抗した。

「だ、駄目です。これだけは駄目なんです」

「この箱、前に見たな」

啓史の言葉に、心臓がバクンと跳ねる。

そのとき、奪い合いをしていた箱が、床に落下した。

「ああっ！」

蓋が外れてしまい、写真が散らばった。

さ、最悪だあ！

「やっぱりか。これ、お前が持ってたんだな？」

「……」

啓史に隠していたことはバレバレで、返事のしようがない。もう泣きたい気分だ。

「おい、なんとか言えよ？」

「……すつ、すみませんでしたあ」
沙帆子は恩赦を求め、平謝りしたのだった。

6 内緒の写真 く啓史く

「ぶっ！」

ぺこぺこ頭を下げる沙帆子の姿に、啓史は我慢しきれずに嘖き出した。床に散らばった写真を数枚拾う。それを見て、沙帆子も慌てて屈み込み、写真を拾い始めた。その間にも、啓史の様子をチラチラと窺ってくる。

沙帆子は、なぜか啓史が機嫌を損ねていると思っっているようだ。

この写真は徹がくれたものなのだが……実はこれらは、啓史が撮った沙帆子の写真なのだ。バレエボールの試合中に撮ったもの、そして卒業式に撮ったもの。

結婚式の夜に沙帆子と一緒に見たのだが、そのあとはすっかり忘れていた。

もうひとつ沙帆子は包みを抱えているが、こちらも見覚えがある。これについて以前沙帆子に尋ねたが、なんであるかは教えてくれなかった。

あときは確か、女の子の秘密の事情とかなんとか言っていたと思うが……
やはり、教えてくれないのだろうか？ だが、秘密にされると気になるんだよな。

「あの、先生、怒ってます？」

「この写真をお前が持っていることに、なんで、俺が怒ると思うんだ？」

「えっ？」

「どうして驚く？ だって、こいつはお前の写真だぞ」

「あ……ああ、は、はい。そ、そうでした」

その返事に、啓史は眉をひそめた。

なんかこの態度、引つかかるな。

沙帆子はまるで啓史の視線を避けるように、必死に写真を拾い集めている。

「なあ、お前、俺になんか隠してないか？」

「えっ？」

ぎよっとしたように沙帆子が顔を上げる。

これはビンゴだな。俺に隠し事があるらしい。

それにしても、こいつとききたら、隠し事が下手過ぎる。

「で、何を隠してる？」

そう聞くと、沙帆子は抱えているもうひとつの包みを、何気なさそうにさらに引き寄せた。そうか。こいつが俺に隠しがつているのは、こっちのほうなんだな。

「沙帆子」

「は、はっ！」

彼女が慌てたように返事をした瞬間を狙い、啓史はもうひとつの包みをかつさらった。

「ああっ！」

「やっぱりか。お前、必死になってこいつを俺から隠そうとしてるよな？」

沙帆子はぎよっとした顔で、瞳を揺らす。

「いったい、これはなんなんだ？」

包みを確認しつつ、問いかける。包みには、新婦様と書いてある。

すると沙帆子はため息を落とし、観念したように「アルバムです」と言った。

「アルバム？」

「その……披露宴で、使われた写真です」

ああ、そうなのか。

沙帆子が必死になって隠していたものの正体が、ようやくわかった。俺と沙帆子の、赤ん坊の頃からいまに至るまでの写真だ。

啓史は包みの中からアルバムを取り出し、パラパラと捲^{めく}ってみた。沙帆子が手を出そうとして、引っ込める。

「あ、あのお？」

「お前、帽子は見つかったのか？」

「えっ？」

「帽子だ、帽子。化粧する代わりに帽子を被っていくんだろ？」

「そ、そうですけど……その前にアルバム、返して……」

啓史はアルバムを、バン！と、音を立てて閉じた。

思ったより大きな音が出て、沙帆子がびっくりしている。

正直、赤ん坊の自分や、小学生の自分が写っている写真なんてもの、気恥ずかしくて誰の目にも晒^{さら}したくない。もちろん、沙帆子にも見られたくないが……

この中には、沙帆子の傑^{けつざく}作な写真も入っているわけだし……

俺が、こいつの目に触れないところに隠したんでは、沙帆子は面白くないだろう。かといって、彼女に手渡す気にもなれない。

まったく、やっかいな代物^{しろもの}を抱え込んだな。

「まあ、いい。ほら」

考えた末に、啓史は沙帆子にアルバムを返した。

「えっ」

こんなに簡単に返してもらえとは思っていなかったのだろう。沙帆子は目を丸くして、アルバムと啓史を交互に見る。

「ただし、隠すなよ」

「……そ、それはつまり、どうすれば？」

「俺にもわかる場所に置いておけ、ということだ。そうだな。お前の本棚に置けばいいんじゃないか」

啓史からすれば、沙帆子の願いに大きく歩み寄つての言葉だったのだが、彼女は顔を歪める。

「い、いえ……わ、わかりました」

渋谷というように顔いた沙帆子は、アルバムを持って仕事部屋に入っていく。

啓史も拾い集めた写真を手に、沙帆子のあとに続いた。

沙帆子がアルバムを本棚に収める。啓史は彼女の机の上に写真を置いた。

「こっちの写真も、アルバムに綴じたほうがいいな。シヨッピングセンターに寄れたら、クツションと一緒に買つてくるとするか」

「はい。あ、でも……クツションはもういらさないんじゃないですか？　これから、車で出かける時は、お化粧するんでしょう？」

「必要なきもあるかもしれないだろ。買つておいたほうがいいさ」

「そうかもしれませんね」

そういえば、徹兄もこいつも見たことがない、沙帆子の写真が、まだあるんだよな。

啓史は徹に内緒で出かけた、沙帆子の中学の音楽祭を思い浮かべた。

あのときは、沙帆子の声も知らなくて……こいつの声を耳で拾えないことに、馬鹿みたいに苛立った。

会場が暗かったから綺麗に撮れなくて……

「なあ、沙帆子」

「はぐ」

「お前の歌が聞きたいな。今度歌つてくれないか？」

「う、歌？　どっ、どうして急に？」

「聞きたいからに決まってるだろう」

「でも……そんなにうまくないから……恥ずかしいです」

うまくなかったら、コーラスには選ばれないだろうと言つてやりたかったが、もちろんそれを口にするのはまずい。

「うまくったぞ」

「えっ？」

「結婚式のとき、歌ったろ」

「……ああ。そういえば……」

「うん？　なんだ？」

「い、いえ……先生も歌つてたなって思い出しました。あそこらへんの記憶は曖昧なんですけど……うまくった気がします。あつ、それじゃあ、わたしも歌うので……」

「却下だ！」

お願いされる前に、断固として拒否する。

「ええーっ！」

「それじゃ、俺は掃除に戻る。お前は帽子を探しておけよ」

啓史はそう言い置き、さつさと掃除に戻ったのだった。

7 至福でいっぱい（沙帆子）

啓史が部屋から出ていくのを見送り、沙帆子は本棚のアルバムに視線を向けた。見つかってしまった、もう駄目かと思っただけれど……こうしておおっぴらに本棚に置くことになつたし、見つかってよかったのかもしれない。隠し続けるって、ストレスになりそうだし。啓史を追って部屋から出ようとしたのだが、もう一度アルバムに目を向け、思わず手に取ってしまう。

ちよつとだけ、先生の写真を見てみよう。

最初のページを開き、赤ん坊の頃の啓史を見る。

うわーっ、やっぱり可愛い！ それでいて、男らしさもあるというか……
かっこよさの片鱗が、すでにこのときから現れておいでだ。

赤ん坊の啓史に会ってみたかった。このとき、自分はまだ生まれていないけど……

そういえば、映像なんかは残っていないのだろうか？ わたしの映像はパパがビデオカメラで撮ってくれていた。運動会のとときか、家族で遊園地に行つたときとか……

先生に尋ねたところで教えてくれそうにないし、聞くとしたら先生のお母さんだろうか？

よし、今日お会いしたときに、聞いてみるとしよう。

そう決めて、アルバムに意識を戻す。パラパラと見るつもりが、ついついじっくり見てしまう。そのとき、ドアが開いた。

「おい！」

ご立腹モードの呼びかけを食らい、沙帆子は内心ぎゃつと叫んだ。

「それを取り上げられたくないなら、さつさとやることをやれ！」

「わかりましたあ」

沙帆子は慌てふためいてアルバムを本棚に戻し、クローゼットルームに舞い戻った。

あー、怖かった。

片付けを終わらせたあと、沙帆子は部屋の中を眺め回す。

「さてと……帽子だったね」

どれにしよう？

うーん、これかな？ ツバも大きいし、顔を隠すならこれが一番かもしれない。この帽子に合う

服は……

服を選んでいたら、掃除を終えたらしい啓史がやってきた。

「ほう、これも綺麗に片付いたな」

「完璧じゃないですけど。もつと時間のあるときに、しつかり片付けます」

「これで充分だ。で、帽子はあつたのか？」

「はい。これでいいかなって」

沙帆子は帽子を手に取り、被ってみせる。

「いいんじゃないか」

「だけど、これに合う服を選ぶのが難しくくて」

「別に服と合わせる必要はないだろう。帽子を被るのは、車に乗ってるときだけでいいんだからな」

「それはそうですね……」

啓史は数着、自分の服を選んで手に取った。

「それじゃ、俺は寝室で着替えてくる。お前も、早く支度しろよ」

「えっ、もう出かける時間になっちゃったんですか？」

「いま、九時十五分だ」

啓史は時間を告げると、さっさと行ってしまった。

もう十五分しかないとは……急がないと。

沙帆子はぶら下がっている服を必死に物色し始めた。

「沙帆子。そろそろ行くぞ」

ドアの向こうから啓史が声をかけてきたが、沙帆子は半分上の空だ。

これでいいかなあ？ それとも、もっとシンプルなデザインの服のほうがいいかな？

それにスカートも、もうちょっと長いほうが……うーん……

淡い桃色の上着を取り出し、また悩む。

「沙帆子！」

鋭い呼びかけに、沙帆子はぎよっとしてドアのほうに視線をやった。

「は、はいっ。な、なんですか？」

「なんですかじゃないだろ。早く出てこいって言ってんだ。もう行くぞ」

「わ、わかっていますよ。けど迷っちゃって」

「迷う？ 何をだ。開けるぞ」

ドアが開けられ、びっくりした沙帆子は「きゃーっ！」と悲鳴を上げた。

まさか、沙帆子の了解も取らずに、ドアを開けるとは思ってもいなかった。

「なんで悲鳴を上げる？」

「だ、だって、着替えの途中で……」

「どこが途中だ？ ちゃんと着てるじゃないか？」

そう指摘されて、むっとする。

「着てますけど、途中なんです。どれを着ていこうか、まだ迷ってるところなんですから」

ぶつぶつ文句を言うと、今度は啓史がむっとする。

「いま、着ているものでいい。迷う必要はない」

手首を掴まれた沙帆子は、足を踏ん張って抵抗した。

「まっ、待ってくださいってば。だって、先生のご実家に行くんですよ。ちゃんとした服装をして

「いけないと……」

「ちゃんとした服装ってなんだ？ いま着ている服じゃ、ちゃんとしてないってのか？」
「もおつ、先生、わっかんないひとですなあ。ですからあ……」

唇を尖らせて言ったら、啓史の目が鋭くなった。沙帆子はびくつとして身を竦める。
「な、な……」

泡を食っていると、ぐいっとほっぺたを掴まれた。

「あわわ……や、やめてくははは」

「俺がなんだって？」

「う……うえ……ほ、ほの……ふわひへふへ、あ、あだだ……」

啓史は沙帆子のほっぺたを手加減なく左右に振る。そのせいで、頭がかくかく揺れる。

「ふっ。面白いな」

「おもひほくないれふ」

「俺は面白いんだ」

啓史は楽しそうにそう言ったあと、ようやく沙帆子の頬を放してくれた。

「さあ、行くぞ」

「ええっ！ で、でも……」

「でもじゃない。その服はまったく問題ない。だいたい、それがいいと思ったから、お前、それを着たんだろう？」

そう言われると、反論できない。

「まあ、そうなんですけど……」

「適当に着たわけじゃない。いいと思った服を着ている。ならば着替える必要はない」
畳み掛けるように言った啓史は、置いてあった帽子を取り上げ、沙帆子の頭に勢いよく被せてきた。

「さあ、行くぞ」

「先生、帽子が深過ぎますよ。目が半分以上隠れて、辺りがあんまり見えません！」

抗議しても、啓史は取り合わない。

「顔を見られずにすむからちょうどいいさ」

もう抗えないと悟り、沙帆子は足元のバッグを慌てて拾い上げた。

走行中の車の助手席で、沙帆子は自分の頬に手を当てた。啓史にいたぶられたほっぺたが、まだジンジンしている。

ほんと、手加減がないんだもん。

先生も一度経験してみればいいのだ。そうしたら、この痛みがいかほどのものかわかって、申し訳なかったと反省するに違いない。

今朝、無防備に寝ていた佐原先生のほっぺたを、ぎゅぎゅーつと摘まんで左右に揺すつてやればよかったかも。

まあ、そんな恐ろしいこと、思うだけで実際はできないけど……

それに、服のことだって……服装ひとつで、印象はだいぶ変わるものなのに……

不安が消えず、沙帆子は着ている服を確認してみた。

ほんとにこれでよかつただろうか？

顔をしかめ、沙帆子は運転している啓史に視線を向けてみた。啓史のほうは、凄く決まっている。何を着ても似合うから、悩むことなどないのだろう。羨ましい限りだ。

あつ、そういうえば、前に服を見立ててくれて言われたんだっけ……わたし、一緒に行くの楽しみにしてるんだよね。いつになったら行けるかな？

「せ……」

呼びかけようとした瞬間、沙帆子はハッとした。『先生』と呼ぶことは、禁止されていたんだ。外では、『啓史さん』と呼ばなければ。

「なんだ、何か話があるんじゃないのか？」

「あつ、はい。服のことを……」

「まだ言うのか？」

不機嫌な返事をもらい、沙帆子は慌てて手を横に振った。

「違います。わたしの服のことじゃなくて、先生の服のことです」

「俺の？」

「あの、それよりも……今日は先生って呼んじゃ駄目ですよね？」

「当然だ」

「で、ですよね。頑張ります」

「ああ、頑張れ」

どうせ駄目だろうが、という啓史の心の声が聞こえてくるようで、沙帆子はむっとした。

こ、こうなったら、呼び捨てにして驚かせてやるっ！

息巻いて口を開く。

「けっ、けーし！」

失敗に終わった。

自分の無様さに唇を噛んでいたら、啓史がぶつと噴き出した。さらに、くっくっくつと愉快そうに笑う。

「わ、笑わないでください！」

「それで俺の服ってなんだ？俺の着ている服、どこがおかしいか？」

沙帆子の言葉を曲解したのか、啓史はそんなことを言う。

「違います。先生は全然おかしくありませんよ。服を見立ててくれて、前に言われたことを思い出して」

「ああ。そうだったな。時間ができたらな。いまのところはそんな余裕もないし」

啓史はそう口にしつつ、沙帆子の胸元に視線を投げてきた。

うん？なんかおかしいかな？

目を向けても、どこがおかしいのかわからない。

「チェーンから外して、結婚指輪を嵌めたらどうだ？ 指に痕がついたとしても、明日には取れる
だろ？」

それって、わたしに指輪を嵌めてほしいってことだよな？

「は、はいっ」

沙帆子は喜びを噛みしめて返事をし、すぐさま首にさげていたチェーンから指輪を外して薬指に
嵌めた。

薬指に嵌まった指輪を見て、照れくさくなる。さらに啓史の薬指に嵌まっている指輪を確認する
と、じわじわと喜びが込み上げてきた。

「啓史さん」

沙帆子は小さな声で名を呼んでみた。啓史の耳には届かないだろうと思っただのに、彼は「うっ
と呻く。

ええっ！ い、いまの、聞こえちゃったの？

「き、聞こえ……ました？」

顔を赤らめておずおずと問いかけたら、少し乱暴な手つきで沙帆子の頭に手のひらが置かれた。
さらに、帽子をはぎ取られる。

沙帆子は、膝の上に落ちた帽子を思わず手に取った。

「聞こえた……まったく、お前って……」

啓史は前方を見たまま、沙帆子の髪をくしゃくしゃにする。

髪を乱されるのは困るが、嬉しさが勝って文句が言えない。
手はすぐに離れてしまったが、胸は至福でいっぱいだ。
沙帆子は照れ隠しに困った顔をしつつ、帽子を被り直した。

8 楽しい言い合い 〔啓史〕

ほんとに、油断も隙もない奴だよな。

この俺に不意打ちをかけるとは……

『啓史さん』という微かな呼びかけに、とんでもなくドキリとさせられた。

でも、いまみたいに呼べるようになってくれるのが、理想なんだよな。

咄嗟に出る呼び名が『先生』では、やはりまずい。

赤信号で車を停めた啓史は、隣の沙帆子に目をやった。

啓史より背が低いから、こんな風にツバのある帽子を被っていると、あまり表情が見えない。

逆に言えば、俺がいくら見つめていても、こいつに気づかれなすむということだ。

それにしても、さっきは着替えの途中だろうと思っただけで、期待してドアを開けたのに、しっかり服
を着ていてがっかりした。半裸状態のところを襲う真似をして、こいつが慌てる様を面白がろうと
思っていたのに。

そのとき、沙帆子が小さくため息を吐いた。

沙帆子は気づいているのかいないのかわからないが、啓史の実家が近づくにつれて、どんどん緊張してきているように思える。

俺の実家に行くくらいのこと、緊張することなんか言いたいが、そんなことを言ったところでリラックスなんてできないだろう。

信号が青になり、アクセルを踏む。

沙帆子が俺の実家に行くのは、今日でまだ三回目か……緊張するのも当然だよな。

沙帆子の左手をちらりと見る。薬指に嵌まっている指輪を見て、いい気分になる。

薬指の指輪に、はじめは啓史もかなり違和感を覚えていたが、いまはそれもなし。昨日、沙帆子の祖父の家を訪問した際は外していたのだが、指輪がないと寂しい気持ちになった。

こいつが高校を卒業すれば、誰に気兼ねすることもなく指輪を嵌めていられるんだがな。それはまだ一年も先だ。

そう考えて顔をしかめてしまった啓史だが、すぐに思い直した。

これからの一年間、沙帆子の成長をこんなに側で見守れるのだ。なのに、さっさと過ぎろと思つて過ごしたら、もつたいないよな。沙帆子と一緒にいることで、面倒な事態になったりするかもしれないが、それらも喜んで受け入れるべきだ。

殊勝な気持ちになつていた啓史だが、突然洋一郎のことを思い出してしまい、胸に苦いものが湧く。洋一郎は沙帆子の従兄なのだが、いきなり登場したと思つたら、こともあろうに俺の沙帆子に抱

きつきやがったのだ。しかも、奴はこれまでずっと、沙帆子に対して過剰なスキンシップをとつていたらしい。

あのあと、芙美子の実家を訪問したから、洋一郎のことはすっかり頭から消えていたが、思い出すと、怒りが煮えたぎってくる。

くっそお、許せねえ！

ハンドルを握る手に、すさまじい力がこもる。

「せ……あ、あの、けいしさん？」

このタイミングで呼びかけられ、鋭い視線を投げてしまう。

「へっ？」

事情がわかっていない沙帆子は、間抜けな声を出す。その反応に憤りが増す。もちろん、沙帆子は何も悪くない。気に食わない野郎に、抱き締められただけ……

「ど、どうしたんですか？ わたし、何もしてませんよね？」

「していない……」

『とも言えないな』と、心の中で続ける。だが、あの野郎のことをいまさら思い出して、怒りを煮えたぎらせているなんて、沙帆子に知られたくない。

「で、ですよね」

沙帆子はそう言ったが、安心はできていないようだ。

「それで、何か話があつて、俺に呼びかけたんじゃないのか？」

「あ、は、はい。あの写真集のこと、頼んでもらえたのかなあって」
「ああ。それなら、徹兄に……」

うん？ そういえば、頼んだものの、まだ返事をもらっていないかったな。

「もう頼んでくれたんですね。先生、ありがとうございます。……でも、今日はさすがに無理ですよね？」

ひどく残念そうだ。

今日ももうことになっている写真集は、芙美子に渡す予定なのだ。

芙美子がもらった写真集は、昨日、沙帆子の祖母の美枝子に渡してしまった。それで芙美子がっかりしていたので、啓史は自分たちがもらう分を芙美子に譲ると約束したのだ。

「それほど待たなくてもいいかもしれないぞ」

「でも、次に先生の実家に行けるのは、来月になっちゃいますよね？」

確かにそうだな。

来週は沙帆子の両親の引越した。啓史たちも引越し先に行くことになっている。

「そのくらい待てるだろう。ほかにも写真はあるんだし、引越し先には芙美子さんに渡した写真集があるんだから」

「それはそうですね」

頬を膨らませている表情がやたら可愛く見える。

それにしても、こいつにしては珍しく聞きわけがないな。だが、その理由が、自分たちの結婚式

の写真集だということが、啓史としては嬉しい。

「あの、け、いしさん？」

「お前、もつと普通に呼べよ」

思わず突っ込む。

「こつ、これでも頑張ってるんですっ！」

力を込めて言い返されて、つい噴いてしまう。

「噴かないでください」

「ごめん。それで？」

「あつ、いえ、その……さつき何か怒ってたようだったから……どうしてかなあって、気になって」
洋一郎のことは、すでに頭から消えていたというのに、こいつ、わざわざ蒸し返すとは……

本当は、気がすむまで沙帆子に八つ当たりしてやりたいが、さすがにそれは大人げなさ過ぎる。

なので、ぐつと堪えることにする。

「ちよつと嫌なことを思い出しただけだ」

「嫌なこと？ あの、それってわたしの祖父母関係ですか？ お祖父ちゃんに何か言われたとか？」

「いや、そうじゃなく」

「それじゃ、学校関係？」

「それも違う。気にするな」

「気になりますよお。先生のことだもん」

その一言に、胸が熱くなった。こいつ、嬉しいことを言ってくれる。洋一郎にはこの先も悩まされるかもしれないが……いまは忘れておこう。

「ありがとな。お前のその気持ちだけで充分だ」

感謝を込めて言ったら、沙帆子がほんのり顔を赤らめた。

「あの、テッチン先生は、今日は家にいらっしやるんでしょうか？」
「いる」

啓史の即答に、沙帆子が驚いて身じろぐ。

「さっき、電話で話したんだ」

「そうですか」

「嫌か、兄貴に会うのは？」

「元担任ですから……落ち着かないというか……」

「そのうち慣れるさ。もう卒業したんだし、担任という意識をなくせばいいんじゃないか」

「それは無理ですよ。けいし……さん、だって、わたしの立場だったら、無理だと思えますよ」
「またもや沙帆子は、啓史の名前をぎこちなく口にする。」

噴きそうになりながら、啓史は「そうかもな」と答えた。

「順平さんは大丈夫なんですけどね」

「あいつに対して緊張する奴なんて、まずいないだろう」

沙帆子がくすくす笑う。

「順平さん、年上だけど、わたしの義理の弟なんですよね」

「まあ、精神年齢でいえば、お前の弟くらいでちょうどいいんじゃないか。あいつはいつまでたっても子どもっぽいやつだな」

「それって、わたしは順平さんより、大人びて見えるってことですか？」

「そういうことではないな」

「えっ、それじゃ、どういうことなんですか？」

「精神年齢に関しては、お前のほうが上ってことだ。まあ、見た目はどっこいどっこいだな」
「こいつはあつという間に成長していく。化粧をすると、完全に大人の女に見られるだろう。」

「なあ、急いで成長することはないぞ。ゆっくりでいい」

「えっ？」

「俺が……」

見逃さないように……と、心の中で呟く。

「はい？ 先生が？」

話の先を催促されたが、啓史はふっと笑って口を閉じた。

「先生？」

『先生』はここからは厳禁だ。ほら、着いたぞ」

車のスピードを落とす。沙帆子は焦ったように窓の外に目を向けた。

「ちよ、ちよっと待ってください」

沙帆子が泡を食って叫ぶ。

「こっ、心の準備がっ！」

「もう着いたんだ、諦める」

ひとりテンパっている沙帆子を面白がっていた啓史だが、母屋の駐車場に目を向けて眉を寄せた。
うん？ 車がひとつもないな。徹兄はいる、と言っていたが……順平はいないのか？

どっちにしろ空いているのはありがたい。俺にここを譲るために、ふたりは工場のほうに停めているのかもしれない。

啓史は車を駐車場に入れた。

「平然と言わないでください」

「じゃあ、どんな風に言えばいいってんだ」

「凄く緊張しちゃってるから、なんでもいいから言いたかったんですよ」

「八つ当たりをすれば緊張が解けるってんなら、いくらでも八つ当たりしろ」

「そう言われて、はいそうですかって、八つ当たりできませんよ！」

「八つ当たりしてんじゃないか」

「むーっ」

言い合いに負けて、沙帆子は啓史を睨む。

啓史は笑いながら、彼女の頭を軽く小突いた。

9 仕方なく腹を括る 沙帆子

「いたっ」

啓史に頭を小突かれた沙帆子は、思わず叫んだ。

「そんならいで、痛いもんか」

その勝手な言い草にちよつとむっとする。そりゃあ、そんなに痛くなかったけど……

それにしても、心の準備が整わないうちに着いてしまったとは。緊張するう。

車を降りる前に落ち着こうと、息を吸ったり吐いたりしていたら、啓史が怖い顔で何かをじっと見ている。何を見ているのかと思ひ、啓史の視線を辿ったが、よくわからない。

「どうしたんですか？」

「別に」

素っ気ない返事。明らかに啓史は不機嫌だ。

「でも、怒ってますよね？」

「過去の順平に対してな」

はい？ 過去の順平さん？

「何があったんですか？」